第二章　ろくでもない日常

1.

幸い、翌日は思っていたよりも早く起きられた。

ボケた頭でオレがぼやぼやとアクビしながら一人通学路を歩いていると、背後からパンッ、と軽快に肩を叩かれた。

「おっす美少女。ぴしっとしろよ、顔が崩れるぞ」

見ると、同級生のいい加減な無責任男、大野だった。オレは深々溜息をついて応える。

「崩したくても崩れないよ」

「相変わらず学ラン似合わねえなあ。無理して男装した美少女にしか見えないぞ」

「うるさいなぁもう。分かってるよ」

せめて私服の中学にすればよかったと後悔したのは入学した後だった。これでも精一杯着崩しているつもりなのだ。ただ、どうしても顔が詰め襟に埋もれたようになってしまう。

そうしてバカな話をしながら行くオレたちの周りには、同じ学校の学生たちがわらわら群をなして登校している。児童は決められた道を決められた時間内に通るよう、厳格に義務づけられているのである。

中学生にもなって通学路もへったくれもないだろうと思うが、やはり制服には専用のチップが縫い込まれていて、教育委員会（キョーイクイインカイ）が最も安全と定めた道順を外れる生徒がいると瞬時に保護員（ホゴイン）がやってきて指導される。

しかもそれだけでは飽き足りないのか、目に付くところに何人も制服警官が立っていて、万一の場合に備えている。おはよーございますおはよーございますと野太い声のオウムのように挨拶してくるから、いちいち煩わしくて仕方がない。

誘拐なんかした日には金を受け取らなくとも死刑を求刑されかねない状況で下手を踏む犯罪者がいるとはオレにはどうしても思えないが、大人たちとしては何かが不安らしい。かくしてオレたちは、毎朝厳戒態勢が敷かれた中を、気楽に喋りあいながら登校するのである。

そうこうするうちオレたちは学校に着いた。五メートルオーヴァーのコンクリ造りの塀が、校舎の周りを囲んでいる。その上には有刺鉄線、門の前には物々しい身なりの警備員が複数立っていて、並んだ自動改札機に学生証をタッチ認証させないと通してもらえない。

何の機密を扱ってるんだと毎朝突っ込みたくなるが、大昔に相次いだ犯罪者の学校闖入事件を防ぐためらしい。ガマンガマン。

慣れた手つきでオレらはそこを通過すると、教室へ向かった。

2.

教室のドアを開けると途端に、たむろした女子連中から「あいちーおっはー」などという脳天気な声が飛んでくる。それを聞いてこちらがムスッとしていると余計にキャーキャー喜んでくるから手に負えない。

オレが彼女たちに向かってついドアの前で口を尖らせていると、いきなり後ろから、冷たい小さな声が聞こえた。

「……邪魔だ。どけ」

そうしてオレの横を通り過ぎていったのは思った通り、シングルボブの頭に巨大なヘッドフォンを付けた、陰気くさい表情のちびっこいメガネの女の子だった。セーラー服の袖が余りまくっていて、その手でずっと携帯を弄っている。画面を見たままで、全く顔を上げようともしない。そのまま彼女は、自分の席へ向かった。

アホの大野が後ろからからかってくる。

「お、なんだー？　天下の人気者美少女にも、終夜（よすがら）は心を開いてくれねーのか？」

「誰がだよ。人気者でも美少女でもない」

言い返しつつ、オレは彼女の姿を目で追っていた。以前からずっと気になっていた娘（こ）だ。

席に着いた彼女、終夜瑞歩（みずほ）は背負っていたナップサックを降ろすと、おもむろに中からモバイルパソコンを取りだした。スリープにしていたらしいそれを開くなりすぐ立ち上げて、その後はただ黙々とキーボードを叩いている。巨大ヘッドフォンはポケットの携帯に繋がっている様子だった。

周囲でグループを作ってケラケラ笑い合っている他の一般人女子たちを、見事なまでに完全遮断している。お互いに見向きもしない。朝っぱらから、実にディープな光景だった。

そんな様を隣で口開けて見ていた呆れ顔の大野が、オレに向かって尋ねてくる。

「やー、さすが学校一の変人だよなあ。なかなか女子でああはいかねえぞ。なあ神志那、お前もアレだろ、オタクなんだろ？　アニメとか声優とか、萌え～って奴だろ？　フジョシって言うんだっけか？」

「腐女子は女だ。それ以外は……まあ大体その通りだよ」

「やっぱああいうのの気持ち分かるか？　人間よりパソコン、みたいなさ」

「まあ……分からなくはないけど」

いや、正直言えばその方が気楽だし、幸福なんじゃないかとすら思う。色々意見はあるだろうが、付き合いたくない人間とまで付き合わずに済むのだから、別に悪いことではないだろう。オレはただ、まだそこまで割り切ることが出来ていないだけだ。

座席の周りにシールドを張ったように別世界へ入り込んでいる終夜の姿を見ながら、アイツってどんな人間なんだろうな、とオレはちょっとだけ思った。アイツが四月に転校してきて以来この方、一向に分からない。

もうすっかり見慣れたが、転校初日はあまりのレベルの高さに度肝を抜かれたものだった。春の明るい日差しの中、ヘッドフォン、メガネ、ナップサック、切りも折りもしていない膝丈の長いスカート、モバイル片手に暗い無表情。何のレベルだかよく分からないが、とにかくレベルが高い。

眼を細めた大野は、オレの顔を覗き込んでくる。

「大体さー、何でお前マンガやアニメの女の子なんかに魅力感じんだよ。そんなのよりお前の方が千倍カワイイだろ。その顔でオタクなんて絶対似合わねーって」

「偏見だろ。そんなの関係ないよ。ナルシストじゃあるまいし。自分の顔なんか見てたって何にも面白くないの。というか、心底呪わしい」

「お前もそんな不健康で非生産的なもんにのめり込んでないで、さっさと適当に彼氏でも捕まえて、まっとうな青春を謳歌しろよ」

「せめて彼女にして」

やるせない気持ち一杯で大野にツッコミを入れながらも、オレは俯いた終夜の姿を離れた場所からじっと眺めていた。
すると、不意に終夜が顔を上げ、こちらを見てきた。
オレのことを、無言で見据えている。
急なことに驚いてしまい、オレは何も言うことが出来ない。
しばらくオレたち二人は、静かに向かい合う。
「……おはよ！　神志那くん」
しかし、唐突に誰かがそんな明るい声と共にオレの視界の中へ入ってきて、奇妙な緊張はあっさり途切れてしまう。
びくりとしたオレは、眼を瞬かせながら応じた。
「速水（はやみ）さん……」
「倫（りん）でいいわよ。どうしたの、そんな暗い顔して」
目の前に現れたのは、流れるような細い眉、意志のしっかりした大きな眼に締まった唇という典型的少女マンガの主人公みたいな顔をした、長髪の美少女だった。小首を傾げて彼女はオレの顔を覗き込んでくる。スレンダーなだけじゃなくグラマーでもあるのが、少女マンガにはなかなかない設定だよなと思う。ま、双葉ほどじゃないが。
「どうって別に……」
暗い顔はデフォルトですけど、とオレは言いかけたが、それを最後まで聞かずに速水さんはくるりと振り返り、オレの視線の先の終夜に気づいた。すでに終夜は、元通り視線をディスプレイに戻している。速水さんは頷いた。
「瑞歩ちゃんね。前から何度か話しかけたんだけど、あまり返事してくれなくて……寂しそうよね。何か落ち込んでるのかしら。それともイヤなことがあるとか」
「いや、全然そんなことないように見えますけど……」
むしろ順調にマイペースを守っているように見受けられる。しかし人の話を聞いているようで全然聞いていない速水さんは、腕組みをして考え込んだ。
「何か悩み事でもあるのかな。イジメとか受けてるって話は、あたしは聞いてないけど……ひょっとして、先生からセクハラされてるとか！」

申し訳ないが、よほど極まった人でない限り終夜のスタイルでは興味を持てないと思う。見たところ小学四、五年生レヴェル、突起もくびれもなく、下手をすればオレよりも平坦だ。

「大丈夫かな、瑞歩ちゃん……ねえ神志那くん、ちょっと話聞きに行ってみない？　ほら、一緒に行こうよ！」

全くリアクションを返せていないオレの手をがっちり握ると、そのまま速水さんは終夜の元へと直行した。強引に引きずられていくオレの視界に入ったのは、いつの間にか存在感を消していた大野が薄い笑みを浮かべて手を振る様だけだった。

「瑞歩ちゃん！」

体操のお兄さんくらいの勢いでずずんと正面から終夜に向かい合った速水さんは、遠慮ゼロでそう話しかけた。オレはよろめきながらその脇へ無理矢理立たされる。

「ごめんね、急に話しかけたりして。あのさ瑞歩ちゃん、最近ずっと沈んでるみたいだけど」

最近ずっとというか、オレが初めて見た時から休むことなくこの調子だと思う。けれど画面に眼を向けたままキーを叩く指以外微動だにしない終夜をものともせず、速水さんは話を続けた。相手はヘッドフォンも付けたままなのに。

「その、もしあたしに何か出来ることがあったら言って？　せっかく一緒のクラスになんだし、お友達になりたいの。心配事とか、悩みとかある？　もしかしたら誰かにイヤガラ」

とそこまで速水さんが親切の塊のように語りかけたところで、終夜はおもむろにディスプレイから顔を上げた。オレらと眼が合う。

そして、こう言った。

「……は？」

三倍ゴシックで表記したくなるぐらい、棘のある声だった。瞬間、教室中が静まり返る。しばらく、時が止まった。

「え、えーと……」

さすがの速水さんでも、こんな反応を返されてまでポジティブに受け止められるほど剛の者じゃない。けれど、周囲の様子をうかがいつつ徐々に後ずさりつつも、

「あの、でも、困ったことがあったらいつでも言ってね、絶対だよ」

とまだ優しく語りかけていた。人間として尊敬に値する。そして、最後には名残惜しそうに、別の女子の一団の中へと入っていった。残されたオレは、所在なく立ちつくした。

どうしたものかとオレはその場でぼんやりとしながらも、何となく目の前の、画面に向いて俯く終夜の妙に艶やかなキューティクル全開の髪を眺めていた。墨ベタにホワイト入れたみたいな感じ。触って撫でてやりたくなるような、独特のフォルムをしている。もしそんなことをしたらどんな目に遭うか想像もしたくないけれど。

「……何だ」

ふと気づくと終夜は、またオレの方を睨んでいる。女子の髪を見つめて妄想するなんてどんなヘンタイだ。イヤぁ、別に何も、などと敗残者の台詞を口にしながら、オレはゆるゆると大野の元へと撤退していった。

ふう、と息を吐くオレに向かって、一部始終を見ていた大野はアッケラカンとした感想を述べる。

「……お前さー、気に入られてるよなぁ」

「あれで気に入ってるってどんだけハードなツンデレだよ。萌えないよ」

「いや終夜じゃなくて。速水だよ。あんな美人となんでよりにもよってお前みたいな……美少女が」

「ケンカ売ってんのか」

「だってさ、毎日毎日大して用もないのに神志那くん神志那くんってすぐ寄ってくんじゃん。さっきなんかパッと手まで繋いで。仲のいい女子同士みたいだったぞ」

ああ。そう言えばそうだった。オレは掴まれた自分の手を見やる。

すべすべで、冷たい手だった。

「なんか熱心だしお前と喋ってるとき嬉しそうだし。ありゃホレてんな。間違いない。おめでとう。学年随一の美少女に見初(みそ)められたわけだ」

「美少女なら毎朝鏡で見飽きてる」

「彼女積極的っぽいし、このままぼーっと待ってたら向こうさんがとんとんと段取り進めてくれるだろきっと」
「ありえない。オレが女子にモテるわけないだろ。この顔で」
それに。オレは、確かに速水さんが圧倒的な美人であることは認めるけれど、でもオレ個人としては、彼女のことは正直……苦手なのだ。
何というか、速水さんの思考や行動パターンは、まるでアメリカのホームコメディのようにまっとうに見える。この世の中は愛と正義に満ちていて、もしそれにそぐわないサムシングがあったなら是正すべき。「人と人とは愛し合うべきだもの」しかも誰かが直してくれるのをただ待つのでなく、自分から正義を執行しに行く。「間違いを許しちゃダメ」そして、そんな努力はいつしか必ず報われる。「信じて頑張るのよ」
だから、少女マンガの主人公みたいに感じられるのかも知れない。素敵だし、結構な話だ。
「だったらいいじゃねーか」
大野はここまで話を聞くと、実に不服そうに疑問をぶつけてきた。
「何の文句があるんだよ。マンガのヒロインみたいな女の子が現実にいたら最高だろ。いい娘じゃん。現実問題として、性格歪みまくった女で世の中溢れてる。俺はそう、悲しいくらい、三人分くらいはよく知ってる。でも、彼女が正直で真面目なのはキャラ作ってるとかじゃねーぞ。見りゃ分かる。あれはマジだよ。大体お前、マンガ好きなんだろ。だったら万々歳じゃんか」
「オレが好きなマンガにはああいう娘は出てこないの」
オレみたいのが少数派だってことは分かってる。彼女は世間の圧倒的多数に好かれるタイプなのだろう。事実、教師たちにも信用されている。今だって、入っていった女子グループの中で、もうすでに話題の中心にいるみたいだった。オレなんかには百回生まれ変わったって出来ない芸当だ。
彼女こそが人気者、彼女こそが主人公だ。彼女の言っていることが変に感じられるオレの方が、ヘンなんだ。それはよく分かっている。
もうあまりに、善人で、思いやりがあって、健康的で、明るくて、誠実で、正しくて。
だから、イヤなんだ。

彼女の中に、オレの逃げ場はない。
チャイムが鳴った。八時三十五分。それとぴったり同時に、教室の前の扉からにやけた顔の担任教師が入ってくる。オレたちはわらわらと席に着いた。
「はい、今朝もみんな元気かなー。それじゃ、朝のホームルーム始めまーす」
セクハラの魔術師こと担任寺嶋（てらしま）は、体育教師らしい単細胞な口振りで朝から血糖値が高そうだった。彼はちらりと終夜の方に目を遣る。彼女は相変わらず巨大ヘッドフォンを嵌めたまま、モバイルをカタカタと操っていた。
彼女が転校してきたばかりの四月五月辺りはまだ、寺嶋も終夜に言うことを聞かせようと、なだめたりすかしたり怒鳴ったりと手を尽くしていた。職員会議でも、彼女のことは問題になっていたらしい。生徒にどのような形でも問題が出れば、責任は１００％教師に押しつけられ遠慮なく首切られる世の中だ。寺嶋も必死だった。
けれど、六月も半ばを過ぎた頃から、徐々に何も言わなくなった。理由は判然としないが、毎朝注意する度に終夜から「……ああ？」と言われハートブレイクだったこと、かといって生徒に手を出したりしたら人生丸々棒に振るくらいの重罪を科せられるから他に手がないこと、そしてどうやら、彼女の家の方から何かお達しがあったらしいことなどが噂された。きっと、前通っていた学校でも同じようなことがあったのだろう。
まあとにかくそんなこんなで、終夜は寺嶋のホームルームのどうしようもなく中身のない長広舌を毎朝全編カットしている。うらやましい限りだ。
「えーとじゃあまあ連絡だけ簡単にな。八木沼（やぎぬま）についてだけども」
そこで初めて、オレたちは教室内の座席が一つ空であることに気がついた。いつもふてぶてしい顔をして座っている、面白いくらい茶髪とピアスとガムの似合わない八木沼が見あたらない。
「先週あいつが、校内で一悶着起こしたことはみんな知ってると思う。それでまあその後、親御さんにも来てもらって、色々話し合って、でまあ、教育委員会（キョーイクイインカイ）の方からも色々あって。八木沼は……しばらく道徳（ドートク）キャンプへ行くことになりました」

途端に教室中が、動揺でざわめきたった。不安と戸惑いが広がる。
「はい静かに、静かにしなさーい。そんな長い期間じゃない。すぐ戻ってくるし、それになにより、これは八木沼のためにやってることだからなー。あのままだと、社会に出たときに八木沼自身が困るんだ。そのためにも、若い今のうちから、ちゃんとした社会のルー」
寺嶋はまだ何か、電話帳の朗読ぐらい聞く気のしない弁舌を長々と垂れ流していたが、もう誰一人聞いていなかったし、オレの耳にも入ってこなかった。

†

道徳（ドートク）キャンプ。それは先代の教育大臣（キョーイクダイジン）が提唱して始まった、児童矯正施設の俗称。公的にはぐだぐだと長たらしい名前が付けられていたが、今はみんなこう呼んでいるのだ。「社会倫理や道徳観念、常識が満足に身についていない子ども」へ徹底的にそれを教え込むための場所だそうである。
オレも身近な人間が送られるのは初めてなので、実際にどんなものなのかは知らない。けれど、風の噂に聞く限り、効果はてきめん、どんなあくどい不良でもきっちり「真人間」になって帰ってくるということだった。そして、それだけ。それ以上の情報は、全く手に入らない。見た者全てが口をつぐむかのように。あな恐ろしや。

†

そんな噂を聞かされても、オレの頭には八木沼がパンツ一丁で壁に縛り付けられ鞭打たれながら泣き泣き道徳の教科書を暗唱させられている珍妙な姿しか浮かんでこなかった。実態など想像も出来ない。まあ、彼（ヒーロー）がご帰還なさるのを楽しみに待つこととしよう。
そうしてその話題も終わり、女子二名とオレがサラリとセクハラの餌食になったところで朝の寺嶋タイムは終わった。具体的な内容はご想像にお任せするが、魔術師の名に恥じない見事なものであった。
その後は、九時ジャストから授業が始まる。一分たりとも遅れることは

ない。教師は時間ちょうどに授業を始め、時間ちょうどに終えることになっている。無駄話で時間を潰したり、自習でお茶を濁したりすることも決してない。

教室に、その全景が映るようカメラが仕込まれているからである。

全教室全授業は、逐一ヴィデオに録画されている。これはウチが私立だからじゃなく、公立も全部そうだ。その昔、いい加減な授業で済ましているような教師が多くいて、その資質が問題にされたことからこうして完全に監視する形になったらしい。「手抜き授業でもし子どもたちの間に学習程度の差が広がったりしたら、その子どもの人生が台無しになりかねない」という話らしい。

その監視によって授業方法や内容、技術に問題があると見なされれば即研修に出され、それでもダメなら希望退職はいさようなら、と処分が下される。実際オレが見てきた中にも、そんな先生は何人かいた。そして、そうならないために他の先生たちはきちんと勉強し、必要にして充分な授業をきっちりこなす。

どんなケチを付けられるか分からないから余計なことは何もしない。淘汰され、自然みんな同じような講義スタイルになっていく。マニュアル通り。ロボットに授業受けても、大して変わりないだろう。

まあたぶん、いいことなんだろう、と思う。よく、分からない。

半端な緊張感のまま、今日も授業は続いた。

3.

一日の授業をこなし、げんなりしながら帰宅したオレは、何という気もなく自室のドアを開けた。

双葉が、オレのパソコンで遊んでいた。

オレは数秒の間その光景をじっと見つめる。廊下から伝わる床板の振動でオレの帰宅に気づいていたらしい双葉は、くるりと振り返るとこちらに向かってニッコリ微笑んだ。

次の瞬間、オレは鞄を投げ捨てると超特急で双葉の元へ駆け寄り、彼女の座る椅子を引っ掴むと机から押しのけた。双葉は車輪付きの椅子ごとく

るくる回りながら、部屋の反対側へ飛んでいく。しかしオレはそれどころではなかった。

何で？　何で？　どうして？　オレはもうパニックだった。ショックのあまり気が遠くなる。意味が分からない。何故ログイン出来る？？

見られてはならないモノで過積載状態のパソコンを大慌てでオレはチェックする。しかし幸い、双葉が見ていたのはネットだけのようだった。「お気に入り」のフォルダは開かれていたがそれもどうやら上から並んだ順、すなわちオレの普段の巡回路通り、まだ比較的ライトでポップなサイトを見ていた段階だったので辛うじてセーフ。もしそのまま続けていれば、終盤には怒濤の勢いでネット社会のカオスへなだれ込むところであった。

『双葉！』

『あ、はい、ゴメンナサイ』

軽く眼を回してふらふらしながら戻ってきた双葉は、すぐ素直にそう謝る。一方まだ息が落ち着かないオレは、何とかこう尋ねた。

『どうやって……どうやってパスワードを突破した？』

『さっき愛くんのお姉さんが、私がこの部屋にいるのに気づいて入ってきてくれて、でもお喋りできないから困ってたら、お姉さんパソコンつけて、いつの間にかパスワード打ち込んで、ワープロソフト動かしてくれたからしばらくお話ししてたの』

なんでだよ、なんでだよ姉貴。昨日変えたばかりのパスがなぜバレたのかまったく分からない。オレは打ちひしがれ頭を抱える。

『それからお姉さんアルバイト行っちゃって……だから見てただけ。十五分くらいだよ』

申し訳なさそうな双葉は、取りつくろうように言った。

『ほら、お姉さん昔から愛くんのことお見通しだから……』

見通せすぎだろ。姉の黒い笑いが脳裏にこだまする。オレはこの歳になってもまだあの悪魔の掌の上から逃れられないのか。なんてことだ。

クリティカルヒットを喰らってよろめくオレだったが、しかしそれでも双葉を許すことにした。

『まあ……そういうことならいいよ。後で双葉が使えるアカウントも作っとくから、今後はそっちを利用して。そして、お願いだから、オレのハー

トをズタボロにする気がないならパソコンには絶対に・手を・触れ・ない・で』

そこまで強く言ってやると、さすがの双葉も少しムッとした様子だった。『分かったけど、でも……なんでそんなに嫌がるの？　見られて困るようなものなんて、パソコンにもインターネットにもないでしょ？』

口を尖らせて、プンプンという書き文字が飛びそうな分かりやすい怒り方をしている。それを見てようやくオレは、ああそうか、と思い、がっくり肩を落とした。一般人の感覚を忘れていたのだ。

†

国内で手に入れられる全てのブラウザソフトには、「教育省（キョーイクショー）が定めた基準に基づき」標準装備で異常なまでに神経質で強固な、国際的に問題視されるほどのフィルタリングがなされている。更に国内向けの検索サイトにも同様のフィルタが仕掛けられていて、この二つの膜を通すとウェブ上の99％以上のサイトは「子どものためにならない」として初めからなかったことにされてしまうのである。しかもこうした事実は、一般的なユーザにはほとんど知らされていない。

実は、解除しようと思えば大人なら誰でも解除できるのだ。表現の自由や閲覧に際する権利は、子どもも含め万人に保障されている。いちおう、形の上では。しかし、ほとんどの親はコンピュータに詳しくない上、イヤガラセのように細々した手順手続きを面倒がるので、初期設定のまま放置されるのが普通なのだ。

そのため世の大多数の子どもはネットの実情を知らず、双葉のように「ちょっとテレビより情報が早いだけのオモチャ」だと思っている。

そして、本来ならオレのパソコンも世間並みにフィルタリングがなされているのだが、まあそこはそれ、オレとしてはあんなサイトやこんなサイトも見たいわけで。自分なりのムダな頑張りの末、現状のようにどこへなりと潜り込めるように環境を整えることに見事成功し、そして、社会の絶望的な裏面を覗き込んでしばしば気分はどん底に陥る。

まあ……どちらが幸せかは難しいところだけど。

†

その辺のことをごまかしごまかし婉曲的に伝えてから、改めてオレは問う。
『で。オレのパソコンなんか見てどうするんだよ』
すると双葉は、少し困ったように言葉を選んでいる。聴者ならここで眼を逸らすところかも知れないが、聾者の場合眼を逸らせたら会話が成立しなくなるのでお互い眼は合ったままだ。
『だって、愛くんあんなに一生懸命隠そうとするから、何があるのかなーって気になって。いくら訊いても教えてくれないし、どういうのに愛くん興味あるのか前からずっと気になってたんだよ。エッチな本じゃないって言うし』
『まあ……そう、ね、違う』
そういうのもなきにしもあらずだけど。
『別に私だってエッチなの見ても……エッチなのじゃないならどういうのが恥ずかしいの？』
『だからさ、双葉がこないだ読んでたようなのも……』
『出てくる女の子のおっぱいが大きいだけじゃないの？』
素直な顔であっさり言われて、オレはたじろぐ。今度はオレが動揺してきた。双葉の人並み以上に大きなその部分を意識しないよう懸命に視線を上げながら、なんとか応じる。
『いや、それは、そ、うだけど……』
『服は着てたじゃない。あと、時々パンツが見えるだけでしょ？　スカートはいて闘ってるんだから普通だと思うけど……違うかな。私が小さい頃見てた女の子向けのアニメって、どんなに闘っても絶対パンツが見えないから不思議だなーってずっと思ってたから、自然でいいと思うけど』
小鳥のように小首を傾げてそんなことを訊いてくる双葉に、オレは何も言い返せない。
『それに、かわいい女の子がいっぱい出てくるから、読んでても楽しいよ。絵も上手だし』

そして、ここまで言われて、オレはやっと思い至った。
……萌え、とか属性、とかヘンに意識してなかったら、何も恥ずかしくないのか？
うーん。そういうものなのだろうか。最早自分が汚れる前の記憶を辿ることが出来ないので、何とも想像が出来ない。悲しい話である。段々自分が何を恥ずかしがっていたのかも、分からなくなってきた。
アホらしい問いにオレが一人懊悩していると、双葉がそうだ、と言った。
『じゃあさ、いいこと思いついた』
『なに？』
『連れてってよ。来週の、うーんと、日曜日に』
『どこへ？』
『だから、駅前の商店街。愛くんがいっつも行ってるお店』
『……ぅえ！』
いきなり途方もないことを言い出した双葉に、オレの顔は引き攣った。
オレの行きつけの店？　あの書店とかあのアニメショップとかあの電器店が頭をよぎるが、いずれも常人が訪れるには危険が伴いすぎる。それに、あんなところへ連れて行ったら結局Ｄドライヴの中味晒すのと同じことになる。おまけに日曜なんて、オレを含むろくでなしどもが大挙して押し寄せていて、とても双葉を連れて行けるような状況じゃないだろう。
すごい勢いで変な汗が流れ出しているオレをよそに、双葉はその思いつきがいたく気に入った様子だった。
『愛くん毎週行ってるんでしょ？　だったら、今度は一緒に行こうよ』
そう言って、オレの手をきゅっと掴んで嬉しそうに何度も振る。しかしオレとしてはそれどころではない。名残惜しみつつその手を離してから、オレは双葉を説得にかかった。
『待て待て待て待て。あそこはその、女の子が行って楽しい場所じゃ……ないんだよ』
『でも女の子のオタクもいるんじゃないの？』
『いや双葉はオタクじゃないだろ。それにお願いだから、今のままでいてください……』
オタクの彼女という夢も悪くないが、どくどくと双葉が汚染されていく

様を見ている方がよっぽどイヤだ。
『それに、言っただろ？　こないだの日曜日にあそこでヘンなヤツに追いかけられたって。それ以外にも何かと危ないんだよその、色々な意味で』
『じゃあ昼間から行けばいいんじゃない？　お昼頃だったらきっと大丈夫』
イヤイヤイヤイヤとオレは首を振る。アウトローの集う番外地には昼も夜もない。
『とにかく。あそこはよくない場所なの。連れてけない。無理。ダメ。絶対に、禁止』
さすがにオレも、「イヤ」とまでは言えなかった。
オレのそんな言葉を聞いた双葉は、しばらくむくれた顔でこちらをじっと眺めていた。どんな顔しようがダメなもんはダメだ。というか、あんなところにそこまでして行きたいのだろうか。興味がない人間が行ったって面白くも何ともないと思うが。付き合いは十年以上になるが、未だに何考えてるのかよく分からない。
すると、少しの間口元に手を当てて考え込んでいた双葉は、やがて意を決したように顔を上げると、唐突にこんな事を言った。

『じゃあ……デートしよっか』

『……ふぁい？』
不意を突かれて何を言われたか分からず目を瞬かせるオレに向かって、双葉は得意げにふふんと笑みを浮かべて胸を張っている。いや、意味が分からない。
『何……言ってんの？』
『だから、来週の日曜日、デートしましょう。むしろしてください。お願いします』
妙に目を輝かせた双葉は、いつになく強くそう主張してくる。デート？何でこの流れでそんな、いきなり。今まで一度だってそんなこと、言った試しなかったのに。
激しく動揺しているオレに、畳みかけるようにしてゆっくりと、双葉は尋ねた。

『ダメ……ですか？』
『へ……いえ、その』
まっすぐに目を覗き込んでくる双葉に、オレの頭は真っ白になる。アレ？　同じことを要求されてるのに、「デート」という単語が混ざってくるだけで途端に抵抗できなくなった。アレ？　どうしてだ？　ん？
『じゃあ、いいですか？』
『ふえ』
もう一度、双葉はしっかりと確認してくる。オレは抵抗できない。
そうしてしまいに、オレはこっくりと頷いてしまった。
『……やったぁ！』
その瞬間、満面の笑顔の双葉はオレにむぎゅっと抱き付いてきた。そのままベッドに押し倒され、もみくちゃにされながら、赤面するオレはもう完全に思考停止状態だった。
アレ？　いいのか？　いいのかオレ？

かくしてオレは、よく分からないうちに丸め込まれ、次の日曜、欲望渦巻くカオティックな商店街で、双葉と生まれて初めてのデートをすることとなった。

……いいのか、オレ？

4.
「ただいま！」
学校から帰った速水倫（はやみりん）は、そう言ってリヴィングのドアを開けた。ソファに座って趣味の刺繍をしていた母親は、彼女の姿を見て柔和に微笑む。窓からは暖かな夕陽が射し込み、部屋には今日も、ゆったりとしたバロック音楽が流れていた。ヴァイオリンを得手とする、父の蔵するレコードである。
母親は尋ねた。
「おかえりなさい。部活はどうでした？」

「もう大変。今日は練習試合をしたんだけど、いきなり先輩のペアと当たっちゃって。もうダメかと思った……勝ったけどね。えへへ」
テニスラケットと鞄を床に置きながらそう応えた倫は、歯を見せて健康的に笑った。それから一直線に台所へ行き、牛乳をコップに注ぐと一息に飲み干す。母親は、楽しげに肩を揺らした。
「汗をかいたなら早めにシャワーを浴びて、着替えなさいね」
はぁい、と生返事した倫は、言われたとおりにバスルームへ向かう。しかしその途中で、ふと立ち止まった。
「お母さん、今日はお父さん、早く帰ってくる？」
「今日は遅くなるって。教育委員会のお仕事がまた最近大変だから……ほら、色々新しい法律が出来るでしょう？　教育委員長なんてやっていると、やらなきゃいけないことがたくさんあるって。どうかしたの？」
「あ、うん。ちょっとね……」
制服のリボンを緩めていた倫は、これは言ってよいことなのかどうか分からず、しばしの間言い淀んだ。
「実は、クラスの子の一人が、道徳キャンプに送られることになったって……」
それを聞いて、まあ、と口を押さえた母親は、眉を顰（ひそ）めた。
「クラスにそんな子がいるの？　不良の子でしょう。美園（みその）学園なら大丈夫だと思っていたのに……お父さんに言っておかないと。倫も、どうして今まで隠していたの」
「違うの！　そうじゃないの。そうじゃなくて……その、お父さんにお願いして、彼、八木沼くんが少しでも早く出られるように、してもらえないかと思って……」
娘の言葉にすっかり驚いてしまった母親だったが、すぐさま優しく諭すようにしてこう続けた。
「倫。お父さんや教育委員の方も、その子のためを思ってやってるのよ。だから……」
「分かってる！　分かってるけど、でも……キャンプってすごく厳しくて大変だっていうし。八木沼くんが、かわいそうよ」
倫は懸命に訴えかける。しかし母親は嘆息し、首を横に振った。

「いけません。そういう考え方はよくないわ。お父さんが帰ってきても、そんなこと言っちゃダメよ……ひょっとして、その子に何か言われたの？　お父さんに一言言うようにって」

「ひどいわお母さん！」

倫は思わず、悲痛に叫んだ。

「どうして分かってくれないの？　あたしはただ、彼がつらいと思って……」

最後まで思いを言葉に出来ないまま、倫はその場を後にすると、洗面室へ急いだ。部屋の中でようやく息を吐くと、手早く服を脱いで髪を解き、そしてバスルームに入る。そこは今の倫が望むように、ひたすら静かだった。

冷たいシャワーを浴びる倫は、鏡越しに自分と見つめ合いながら、こう思った。

なぜお母さんは、あんなことを言うのだろう。自分には悪気などなかった。ただ、苦しんでいるクラスメートを助けてあげたいだけだったのに。お母さんはいつだってそうだ。自分では何にも行動せずに、ああやって口先で文句を言うばかり。そんなのズルイ。卑怯だ。

でも、あたしはそうじゃない。友達のためなら、何だってしてあげる。今彼が不良みたいになっているのだって、きっと何か理由があったはずだわ。それを悪人扱いするなんて、絶対にダメよ。せっかく一緒のクラスになれたのだから、出来る限りのことはしてあげないと。お母さんはああ言うけれど、お父さんが帰ってきたら、お願いしてみよう。うん。そうしよう。

水の滴る髪を指でしばらくいじり、それからまた、倫は考える。

神志那（かみしな）くんならこんなとき、どうするだろう。彼は今、何をしているのだろう。

「神志那くん……」

倫は疼く自分の胸を押さえると、小さく吐息を漏らした。